

『朱子語類』卷第一百二十五「老氏」「莊子附」訳注(一)

山 田 俊

緒言

本稿は、『朱子語類』卷第一百二十五「老氏」「莊子附」の訳注である。『朱子語類』は続く卷一百二十六で「釋氏」を論じ、朱熹の立場からする異端への発言として「両卷は内容上相互に出入する部分が少なくないが、特に卷一百二十五に於ける朱熹の発言は、その後の道家思想に大きな影響を与えた点で注目される。

既に、卷一百二十六に就いては、野口善敬氏を中心とするグループが『東洋古典學研究』に訳注の掲載を開始しておられる。本訳注は、朱子学を専門としない者の作成したものであり、不備な箇所も多々有ることと思われる。忌憚なき御批正を請う次第である。尚、訳注作成に当っては訓読の準備も有るが、紙幅の都合上、一切割愛した。

《訳注凡例》

●本訳注の底本には『朱子語類』(理学叢書本。中華書局、1989年)を用いた。校勘に使用した各種版本とその略称は以下の通りである。

- 『朝鮮古寫徽州本朱子語類』(中文出版社)：楠本本
- 『朝鮮整版朱子語類』(中文出版社)：朝鮮整版
- 『朱子語類』(正中書局本)：正中書局本
- 『朱子語類大全』(和刻本。中文出版社)：和刻本
- 本訳注で頻繁に引用する文献とその略称は以下の通りである。その外は随時提示した。
- 『朱子文集』(四部叢刊初編)：『文集』
- 『宋元學案』(中華書局排印、1986年)：『學案』
- 『宋元學案補遺』(四明叢書)：『補遺』
- 『二程集』(理學叢書。中華書局、1981年)：『二程集』

- ・『史記』（中華書局、1982年）
- ・樓宇烈校釈『王弼集校釈』所収『老子道德經』、『周易』（中華書局、1980年）
- ・王先謙撰『莊子集解・莊子集解内篇補正』（新編諸子集成。中華書局、1987年）
- ・焦循撰『孟子正義』（新編諸子集成。中華書局、1991年）
- 本訳注の作成に際して参照した諸論著とその略称は以下の通りである。
- ・田中謙二著『朱子語類外任篇訳註』（汲古書院、1994年）：『田中』
- ・田中謙二『朱門弟子師事年攷』（『田中謙二著作集』第三卷所収。汲古書院、平成13年）：『師事』
- ・三浦國雄『中国文明選』朱子集』朝日新聞社、1976年。後に補訂版が『朱子語類抄』と改題の上、講談社学術文庫所収、2008年）：『三浦語類』（講談社学術文庫版）。
- ・垣内景子、恩田裕正『朱子語類』訳注 卷一～三』（汲古書院、平成9年）：『朱子語類訳注卷一～三』
- 語彙・語法に就いては以下の辞書及び論述を参照した。
- ・龍潜庵編『宋元語言詞典』（上海辞書出版社、1985年）
- ・古賀英彦「禅語録を読むための基本語彙初稿」（『禪學

研究』第61号、1985年）：古賀「初稿」

・太田辰夫『中国語史通考』（白帝社、1988年）

・許少峰編『近代漢語大詞典』（中華書局、2008年）

朱子語類卷第一百二十五

老氏〔莊子附〕^{〔校1〕}

老子

〔校1〕楠本本は「老子〔莊子等附〕」に作る。朝鮮整版、和刻本、正中書局本は「附」の字無し。

〔1〕

康節^{〔1〕}嘗言「老氏得易之體、孟子得易之用」^{〔2〕}、非也。

老子自有老子之體用、孟子自有孟子之體用。「將欲取之、必固與之」^{〔3〕}、此老子之體用也。存心養性、充廣^{〔校1〕}其四端^{〔4〕}、此孟子之體用也。「廣」^{〔5〕}

〔校1〕朝鮮整版は「擴充」に作る。尚、注〔4〕『孟子』では「擴而充之」となっている。

〔訳〕

邵康節は嘗て「老子は『易』の体を理解しており、孟子は『易』の用を理解している」と言ったが、それは誤りである。老子には自ずと老子の体用があり、孟子には自ずと

孟子の体用が有るのだ。「もしそれを奪い取ろうと思えば、暫く施し与えるべきだ」、これが老子の体用である。本心を大切に維持し本性を養い、四端を育て立派にさせる、これが孟子の体用である。(輔広)

[注]

(1)「康節」：邵雍(1011～1077)、字は堯夫、諡を康節、河南省衡章の人。北宋に於ける宋学の先駆者の一人。『宋史』卷四二七、『學案』卷九(p.365)、『補遺』卷九(9.71b)、『宋人軼事彙編』(台湾商務印書館、1935年。p.419)。

(2)「老氏得易之體、孟子得易之用」：『皇極經世』に「顯諸仁、藏諸用、孟子善藏其用乎」(『道藏』本、邵雍『皇極經世』12下/6b/3)、「知易者、不必引用。講解是爲知易。孟子之言未嘗及易、其間易道存焉。但人見之者鮮耳。人能周易是爲知易。如孟子可謂善用易者也」(『同』12下/13a/8)、「老子知易之體者也」(『同』12下/26b/6)と有る。『語類』(は邵雍の)の発言に度々言及し、「今之道家、只是馳驚於外、安識所謂載魄守一、能勿離乎。康節云、老子得易之體、孟子得易之用。康節之學、意思微似莊老」(『語類』卷八七「禮四 小戴禮 祭義」p.2259)、「康節甚

喜張子房、以爲子房善藏其用。以老子爲得易之體、以孟子爲得易之用、合二者而用之、想見善處事」(『語類』卷百「邵氏之書」p.2543)、「他嘗說老子得易之體、孟子得易之用。體用自分、作兩截」(『語類』卷百「邵氏之書」p.2543)等と見られぬ。

(3)「將欲取之、必固與之」：「將欲歛之、必固張之。將欲弱之、必固強之。將欲廢之、必固興之。將欲奪之、必固與之、是謂微明。柔弱勝剛強。魚不可脫於淵、國之利器、不可以示人」(『老子』第三十六章)。

(4)「充廣其四端」：『孟子』に「孟子曰、盡其心者、知其性也。知其性、則知天矣。存其心、養其性、所以事天也。殀壽不貳、修身以俟之、所以立命也」(『孟子』「盡心上」p.877)、「孟子曰、…人之有是四端也、猶其有四體也。有是四端、而自謂不能者、自賊者也。謂其君不能者、賊其君者也。凡有四端於我者、知皆擴而充之矣、若火之始然、泉之始達。苟能充之、足以保四海、苟不充之、不足以事父母」(『孟子』「公孫丑上」p.235)と有る。

(5)「廣」：輔廣、字は漢卿、浙江省崇寧の人。『學案』卷六十四(p.2053)、『補遺』卷六十四(64.1a)。尚、『師事』(p.272)、『三浦語類』(p.36)。

【2】

老子之術^{〔1〕}、謙冲儉嗇^{〔校1〕〔2〕}、全^{〔校2〕}不肯役精神^{〔3〕}。

〔閔祖^{〔4〕}〕

（校1）楠本本は「冲嗇」と謙「儉」の二字を欠き、「冲」を「冲」に作る。正中書局本、和刻本は「冲」を「冲」に作る。（校2）楠本本は「全」の字無し。

※楠本本は【1】と【3】の順が入れ替わっている。

〔訳〕

老子の術は、「謙・冲・儉・嗇」であり、精神を全く働かせようとしないものだ。（李閔祖）

〔注〕

（1）「老子之術」：『史記』に「莊子者、蒙人也。…故其著書十餘萬言、大抵率寓言也。作漁父・盜跖・胠篋、以詆訛孔子之徒、以明老子之術」、『史記』「老子韓非列傳第三」p.2143と有る。

（2）「冲」：『老子』に「道冲而用之或不盈、淵兮似萬物之宗」、『老子』第四章、「大成和若缺、其用不弊。大盈若冲、其用不窮」、『同』第四十五章と有る。

「儉」：『老子』に「我有三寶、持而保之。一曰慈、二曰儉、三曰不敢爲天下先。慈、故能勇。儉、故能廣。

不敢爲天下先、故能成器長。今舍慈且勇、舍儉且廣、舍後且先、死矣。夫慈、以戰則勝、以守則固、天將救之、以慈衛之」、『同』第六十七章と有る。

「嗇」：『老子』に「治人事天莫若嗇。夫唯嗇、是謂早服。早服謂之重積德。重積德則無不克。無不克則莫知其極、莫知其極、可以有國。有國之母、可以長久。是謂深根固柢、長生久視之道」、『同』第五十九章と有る。「嗇」に就いては本巻【37】、【46】～【48】の各條を参照。

「謙」：『老子』には「謙」の字は見られないが、王弼『老子注』は「行、謂行陳也。言以謙退哀慈、不敢爲物先」（六十九章）、「清靜無爲謂之居、謙後不盈謂之生」（七十二章）と有る。

（3）「精神」：道家と「精神」の語に就いては、『史記』「六家要指」に「道家使人精神專一、動合無形、瞻足萬物」、『史記』「太史公自序」p.3289と有る。

（4）閔祖：…李閔祖、字は守約、福建省光澤の人。『學案』卷六十九（p.294）、「補遺」卷六十九（997b）。「尚」、『師事』（p.101）、「川浦語類』（p.352）。

【3】

老子之術、須⁽¹⁾自家占得十分穩便^(校¹)、方肯做。才有一毫^(校²)於己不便^(校¹)、便^(校¹)不肯做。〔閔祖〕

(校¹)「便」、朝鮮整版は「便」に作る。(校²)「毫」、正中書局本は「豪」に作る。

〔訳〕

老子の術は、自分自身にとつて充分に安定して都合がよい場合でなければ行おうとしないものである。わずかでも自分にとつて不都合があれば、行おうとはしないのだ。

(李闕祖)

〔注〕

(1)「須」：「須(是)〜始得」(すべからず〜してはじめてよし)」と類似の句法と思われる。太田『中国語史通考』(p.220)、「古賀」初稿』(p.148)。

(2)「占得十分穩便」：「占得穩便」「占便宜」「得便宜」とも言う。『語類』には「汎愛、不是人人去愛他。如羣居不將一等相擾害底事去聒噪他、及自占便宜之類是也」(『語類』卷二「論語三 學而篇中 弟子入則孝章」p.499)等と頻出するが、『三浦語類』は「甘い汁を吸う」(p.415)と訳出している。又、「且如孟之反不伐、是他自占便宜處、便如老子所謂不爲天下

先底意思」(『語類』卷二十九「論語十一 公冶長下

子在陳章」p.752)、「老子是箇占便宜、不肯擔當做事底人、自守在裏、看你外面天翻地覆、都不管、此豈不是少恩」(『語録』卷百三十七「戰國漢唐諸子」p.3253)等と、「老子」を批判的に描写する語として見られる。『三浦語類』(p.417)参照。『宋元語言詞典』は「不顧別人利害、只求利己」と訳出し、『二程集』卷十二「陳平亦不是推讓能底人。只是占便宜、令周勃先試難也、其謀勘拙」を引く(p.231)。

尚、『語類』に見られる「動詞+得+目的語」の解釈に関しては、暫時、劉子瑜「朱子語類」述補結構研究』(商務印書館、2008年)に依り、「得」に前置される動詞を「取義動詞」と「非取義動詞」に二分し、前者の場合は「得」に獲得の義が残る複音節動詞とし、後者の場合は「得」が「達成を意味する虚字と化している」として解することとした。

【4】

老子之學、大抵以虛靜無爲、冲退自守爲事⁽¹⁾。故其爲說、常以懦弱謙下爲表、以空虛不毀萬物爲實⁽²⁾。其爲治、雖曰「我無爲而民自化」⁽³⁾、然不化者則亦不之問

也。其爲道每每如此、非特「載營魄」⁽⁴⁾一章之指爲然也。若曰「旁日月、扶宇宙、揮斥八極、神氣不變」⁽⁵⁾者、是乃莊生之荒唐⁽⁶⁾、其曰「光明寂照、無所不通、不動道場、徧周沙界」⁽⁷⁾者、則又瞿曇之幻語⁽⁸⁾、老子則初葛嘗有是哉。今世人論老子者、必欲合二家之似而一之、以爲神常載魄而無所不之、則是莊釋之所談、而非老子之意矣⁽⁹⁾。

「儻」⁽¹⁰⁾

※ 楠本本はこの条無し。

〔訳〕

老子の学問は、大体「虚静無為」「冲退自守」をその内容とする。従つて、その説は、常に「もの柔らかく謙ること」を世間的な態度とし、自分を空っぽにして万物を害わないうことを内実とする」というものである。その統治思想は、「我が無為であれば民は自ずから教化される」と言つてはいるものの、民が教化されなかつた場合に就いては問題としていないのだ。老子の「道」というものはいつもこの様なものであり、「營魄を載せ」の一章の内容に限つたことではないのである。「日月と並び、宇宙を小脇に抱え、四方八方を駆け巡りながら、心には何の動揺もない」とは、莊子の荒唐無稽な説であり、「光明は静かに明々と照らし、あらゆる所に行き渡り、道と一体となつた境地から離れる。」

となくして、現実世界に遍く行き渡る」とは、仏教のたらしめな説であり、老子がもともとこの様な(万物に積極的に働きかける)事を言つていた訳では決してないのである。今の人々が老子を論じる時、必ず莊子と仏教の類似点を合わせて(老子と)一緒にし、それに依つて『神』が常に『魄』を載せて至る所に行くのだ」等と解釈しようとしているが、これは莊子や仏教の説であつて、老子の意図する所ではないのである。(沈儻)

〔注〕

(1)「虚」「静」：『老子』に「致虚極、守静篤。萬物並作、吾以觀復」(『老子』第十六章)等多用されているが、「虚静」の語は『老子』には見られない。『淮南子』「精神訓」には「使耳目精明玄達而無誘慕、氣志虚静恬愉而省嗜慾、五藏定寧充盈而不泄、精神内守形骸而不外越、則望於往世之前、而視於來事之後、猶未足爲也、豈直禍福之間哉」(新編諸子集成『淮南鴻烈集解』卷七精神訓 p. 222。中華書局、1989年)と有る。尚、王弼は第十六章注で「以虚静觀其反復。凡有起於虚、動起於静。故萬物雖並動作、卒復歸於虚静。是物之極篤也」と「虚静」の語を用いている。

「無爲」：『老子』には「是以聖人處無爲之事」(『老子』第二章)、「爲無爲、則無不治」(『同』第三章)、「道常無爲而無不爲」(『同』第三十七章)の他、三十八、四十三、四十八、五十七章、六十三、六十四の各章に有る。

「退」：『老子』には「功遂身退、天之道」(『同』九章)、「明道若昧、進道若退、夷道若類」(『同』第四十一章)、「用兵有言、吾不敢爲主而爲客、不敢進寸而退尺」(『同』第六十九章)と有る。

「守」：『老子』には「多言數窮、不如守中」(『同』第五章)、「金玉滿堂、莫之能守」(『同』第九章)の他、三十二、三十七、五十二、六十七の各章に見られる。

「冲」：【2】注(2)を参照。尚、「冲退」の語は、『春秋左氏傳』昭公五年「謙不足、飛不翔。垂不峻、翼不廣」の杜預注に「謙道冲退、故飛不遠翔」と有る(四部叢刊初編『春秋經傳集解』卷二十一)。

(2)「常以懦弱謙下爲表、以空虛不毀萬物爲實」：直接的には「以本爲精、以物爲粗、以有積爲不足、澹然獨與神明居。古之道術有在於是者。關尹、老聃、聞其風而悅之。建之以常無有、主之以太一、以濡

弱謙下爲表、以空虛不毀萬物爲實」(『莊子』「天下」p.294)と『莊子』に見られるものに基づく。関連語句としては、「柔弱」(『老子』第三十六章。前掲)、「人生也柔弱、其死也堅強」(『同』七十六章)、「夫兩者各得其所欲、大者宜爲下」(『同』第六十一章)、「江海所以能爲百谷王者、以其善下之」(『同』第六十六章)、「虚而不屈、動而愈出」(『同』第五章)等がある。

(3)「我無爲而民自化」：『老子』には「故聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸」(『老子』第五十七章)と有る。尚、蘇軾「蓋公堂記」、「上清儲祥宮碑」等は「民の自定」を「貴清淨而民自定」と積極的に評価し、一方の王安石「答王深甫書」は「物」が「自正」するのに任せる在り方は正しくないと批判しているなど、北宋に於ける議論を踏まえた朱熹の発言と考えられる。

(4)「載營魄」：『老子』に「載營魄抱一、能無離乎。專氣致柔、能嬰兒乎。滌除玄覽、能無疵乎。愛民治國、能無知乎。天門闢闔、能無雌乎。明白四達、能無爲乎。生之、畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰。是謂玄德」(『老子』第十章)と有る。尚、【34】條

を参照。

(5) 「旁日月、神氣不變」：『莊子』に「予嘗爲女妄言之。女亦以妄聽之、奚。旁日月、挾宇宙、爲其陷合、置其滑滑、以隸相尊。衆人役役、聖人愚菟、參萬歲而一成純。萬物盡然、而以是相蘊」、『莊子』『齊物論』p.24)、「夫至人者、上闚青天、下潛黃泉、揮斥八極、神氣不變」(『同』『田子方』p.12)と有る。

(6) 「莊生之荒唐」：『莊子』に「莊周聞其風而悅之。以謬悠之說、荒唐之言、無端岸之辭、時恣縱而不儻、不以觴見之也」(『莊子』『天下篇』p.295)と有る。

(7) 「光明寂照、徧周沙界」：『語類』に「唐張拙詩云、光明寂照徧河沙、凡聖含靈共我家、云云」(『語類』卷一一六「釋氏」p.302)と見られる様に、唐・張拙の偈に「光明寂照徧河沙、凡聖含靈共我家。一念不生全體現、六根纒動被雲遮。斷除煩惱重增病、趣向眞如亦是邪。隨順世緣無罣礙、涅槃生死等空花」(中國佛教典籍選刊『五燈會元』卷六「青原下五世石霜諸禪師法嗣 張拙秀才」p.316。中華書局、1984年)と有る。

(8) 「瞿曇」：本来は釈迦の姓だが、(一)では仏教を指す。

(9) 「載營魄」：朱熹は「王弼解載作處、魄作所居、言常處於所居也、更是胡說。據穎濱解老子、全不曉得老子大意。他解神載魄而行、便是箇剛強外舉底意思。老子之意正不如此、只是要柔伏退步耳。觀他這一章盡說柔底意思、云、載營魄、抱一、能無離乎。專氣致柔、能嬰兒乎。天門開闔、能爲雌乎。老子一書意思都是如此」(『語類』卷一三七「戰國漢唐諸子」p.326)、或いは「但爲之說者、不能深考。如河上公之言老子、以營爲魂、則固非字義、而又并言人載魂魄之上以得生、當愛養之、則又失其文意。獨其載字之義粗爲得之、然不足以補其所失之多也。若王輔嗣以載爲處、以營魄爲人所常居之處、則亦河上之意。至於近世、而蘇子由、王元澤之說出焉、則此二人者、平生之論如水火之不同、而於此義皆以魂爲神、以魄爲物、而欲使神常載魄以行、不欲使神爲魄之所載。(朱熹『楚辭集注』所收「楚辭辯證 遠遊」p.210。上海古籍出版社・安徽教育出版社、2001年)と述べ、諸注に同様の批判を加えている。(一)で批判されている注に就いては、「聖人性定而神凝、不爲物遷、雖以魄爲舍、而神所欲行、魄無不從、則神常載魄矣」(『道德眞經註』/10a/9蘇轍注)、「魄陰物形

之主也。神之爲物、廣大通達而不自了者。神常載於魄、故神反拘於形體。此廣者所以通、狹者所以滯也。欲學此道者、當先廓其志氣、勿累於形體、使神常載魄而不載於魄、則可以抱一而體神矣。」(『道德眞經集註』2/8b/9王雱注)と有る。尚、【34】條を参照。

(10)「儻」：沈儻、字は仲莊、浙江省永嘉の人。『學案』卷六十九(p.2288)、『補遺』卷六十九(69:59a)。尚、『師事』(p.157)、『二浦語類』(p.34)。

【5】

伯豐⁽¹⁾問、「程子曰『老子之言竊弄闔闢』⁽²⁾者、何也。曰、「如『將欲取之、必固與之』⁽³⁾之類、是它亦窺得些道理、將來竊弄。如所謂『代大匠斲則傷手』⁽⁴⁾者、謂如人之惡者、不必自去治它、自有別人與它理會。只是占便⁽⁵⁾、不肯自犯手做」。營曰、「此正推惡離己」。曰、「固是。如子房⁽⁶⁾爲韓報秦、攬掇⁽⁷⁾高祖入關、及項羽殺韓王成、又使高祖平項羽、兩次報仇皆不自做。後來定太子事、它亦自處閑⁽⁸⁾地、又只教四老人⁽⁹⁾出來定之」。[營]⁽⁹⁾

※楠本本はこの条無し。

※『二浦語類』(p.414)

(校1)「便」、朝鮮整版は「儻」に作る。(校2)「閑」、朝鮮整版は「間」に作る。

[訳]

吳伯豐の質問「程子が『老子の言葉は造化のからくりを盗んで弄んでいる』と言ったのは何故でしょう」。朱子『もそれを奪い取るうと思えば、暫く施し与えるべきだ』などと言っているのは、老子もやはり道理をのぞき見ることが出来た上で、それを盗んで弄んでいるのだ。『大工の名人に代わって木を削れば、自分の手を傷付ける』と言っているのは、悪い奴は自らは関与せず、別の人に対処させると言っているようなものだ。自分はただ甘い汁を吸うだけで、決して自から手を下そうとはしないのだ。黄營「それは悪を自分から遠ざけておくということですか」。朱子「まさにその通りだ。張子房が韓のために秦に報復しようとして、高祖をそそのかして饒閑に入らせ、項羽が韓王成を殺すと、また高祖に項羽を滅ぼさせ、こうして、二度も仇を討ったなどは、どちらの場合にも、自分で手を下そうとはしなかった。後に皇太子を誰にするかという問題が持ち上がる、彼はまた自分は気楽な所に居て、やはり四人の老人を登場させて決めたのだ。」(黄營)

[注]

- (1) 「伯豊」：呉必大、字は伯豊、湖北省興国軍の人。『學案』卷六十九(p.2318)、『補遺』卷六十九(69.131b)尚、『師事』(p.109)、『三浦語類』(p.55)。
- (2) 「程子曰」：老子之言、竊弄關闔者也(程明道)。「二程集」卷十一、p.121。「闔闔」の語は「是故闔戸謂之坤。闔戸謂之乾。一闔一闔謂之變。往來不窮、謂之通」(『周易』卷七「繫辭上」p.552)、「天門開闔、能無雌乎」(『老子』第十章)等と有る。
- (3) 「將欲取之、必固與之」：【1】條注(3)を参照。尚、程伊川は『老子』三十六章を踏まえ「老氏之學、更挾些權詐。若言與之乃意在取之、張之乃意在翕之。又大意在愚其民而自智。然則秦之愚黔首、其術蓋亦出於此」(『二程集』卷十五、p.156)と述べている。
- (4) 「代大匠斲則傷手」：『老子』に「民不畏死、奈何以死懼之。若使民常畏死、而爲奇者吾得執而殺之、孰敢。常有司殺者殺、夫代司殺者殺、是謂代大匠斲。夫代大匠斲者、希有不傷其手矣」(『老子』第七十四章)と有る。
- (5) 「占便宜」：【3】條注(2)を参照。
- (6) 「子房」：漢の張良。【7】條注(7)を参照。尚、張子房が自ら手を下さなかつたことに就いては、『史記』に「漢六年正月、封功臣。良未嘗有戰鬪功、高帝曰、運籌策帷帳中、決勝千里外、子房功也。自擇齊三萬戸」(『史記』卷五十五「留侯世家第二十五」p.2942)と見られ、『語類』も「因論康節之學、曰、似老子。只是自要尋箇寬閒快活處、人皆害它不得。後來張子房亦是如此。方衆人紛拏擾擾時、它自在背處」(『語類』卷百「邵子之書」p.2544)と述べてる。
- (7) 「攬撥」：「そのかず」。「語類」には、「聖人做出這一件物事來、使學者聞之、自然權喜、情願上這一條路去、四方八面攬撥他去這路上行」(『語類』卷三五「論語十七 泰伯篇「興於詩章」p.93)等と有る。
- (8) 「四老人」：東園公、綺里季、夏黃公、甬里先生の「四皓」を指す。『史記』には「呂澤彊要曰、爲我畫計。留侯曰、此難以口舌爭也。顧上有不能致者、天下有四人。四人者年老矣、皆以爲上慢侮人、故逃匿山中、義不爲漢臣。然上高此四人。今公誠能無愛金玉璧帛、令太子爲書、卑辭安車、因使辯士固請、宜來。來、以爲客、時時從入朝、令上見之、則必異而問之。問之、上知此四人賢、則一助也。…漢十二年、上從擊破布軍歸。疾益甚、愈欲易太子。留

侯諫、不聽、因疾不視事。叔孫太傅稱說引古今、以死爭太子。上詳許之、猶欲易之。及燕、置席、太子侍。四人從太子。年皆八十有餘、鬚眉皓白、衣冠甚偉。上怪之、問曰、彼何爲者。四人前對、各言名姓、曰、東園公、角里先生、綺里季、夏黃公。上乃大驚、曰、吾求公數歲、公辟逃我、今公何自從吾兒游乎。四人皆曰、陛下輕士善號、臣等義不受辱、故恐而亡匿。竊聞太子爲人仁孝、恭敬愛士、天下莫不延頸欲爲太子死者、故臣等來耳。上曰、煩公幸卒調護太子。四人爲壽已畢、趨去。上目送之、召戚夫人指示四人者曰、我欲易之、彼四人輔之。羽翼已成、難動矣。呂后眞而主矣」(『史記』卷五十五「留侯世家」第二十五(p.2045)と有²⁶。

(9)「營」：黃營、字は子耕、江西省分寧の人。北宋の詩人・黄山谷の従孫。『宋史』卷四二二、「學案」卷六十九(p.2276)、「補遺」卷六十九(69.40b)。尚、『師事』(p.109)、「川浦語類」(p.360)。

【6】

老子不犯手、張子房其學也。陶淵明亦只是老莊⁽¹⁾。

※楠本本は「この条無し」。

〔訳〕

老子は自ら手を下そうとはしない、張子房はその学派である。陶淵明の思想も老莊の思想に過ぎない。

〔注〕

(1)「陶淵明」：『語類』に「淵明所說莊老、然辭却簡古。

堯夫辭極卑、道理却密」(『語録』卷一三六、歷代三)

p.3243)と有²⁶。

【7】

問、「楊氏愛身、其學亦淺近、而舉世宗⁽¹⁾尚之⁽¹⁾、何也」。曰、「其學也不淺近、自有好處、便⁽²⁾是老子之學。

今觀老子書、自有許多說話、人如何不愛。其學也要出來

治天下、清虛⁽²⁾無爲、所謂「因者君之綱」⁽³⁾、事事只是因

而爲之。如漢文帝・曹參⁽⁴⁾、便⁽²⁾是用老氏之效、然又只

用得老子皮膚、凡事只是包容因循⁽⁵⁾將去。老氏之學最

忍、它閑⁽³⁾時似箇虛無卑弱底人、莫教緊要處發出來、

更⁽⁴⁾教你枝⁽⁵⁾ 梧不住⁽⁶⁾、如張子房是也。子房皆老氏

之學。如峽關之戰、與秦將連和了、忽乘其懈擊之⁽⁷⁾。鴻

溝之約、與項羽講和⁽⁸⁾了、忽回⁽¹⁾軍殺之⁽⁸⁾、這箇便⁽²⁾

是他柔弱⁽⁹⁾之發處。可畏、可畏。它計⁽⁸⁾策不須多、只

消⁽¹⁰⁾兩三⁽⁹⁾次如此、高祖之業成矣」(『個

〔校1〕「宗」、朝鮮整版、正中書局本は「崇」に作る。
 〔校2〕「優」、朝鮮整版は「浩」に作る。〔校3〕「閑」、朝鮮整版は「間」に作る。〔校4〕「更」、朝鮮整版は「更」に作る。〔校5〕「枝」、朝鮮整版、正中書局本、和刻本は「支」に作る。〔校6〕「和」、朝鮮整版、正中書局本、和刻本は「解」に作る。〔校7〕「回」、朝鮮整版、正中書局本、和刻本は「回」に作る。〔校8〕「計」、朝鮮整版は「謀」に作り、正中書局本は「詩」に作る。〔校9〕「兩三」、朝鮮整版、正中書局本は「三兩」に作る。
 ※楠本本はこの条無し。

〔訳〕

質問「楊朱は自分自身を愛し、その学問も浅く皮相的なものであったのに、世間がこれを尊んだのは、何故なのでしょう。か」。朱子「楊朱の学問も浅くなく良い点も自ずとあるのだ。それが老子の学問の部分なのだ。今、老子の書を見ると、そこには多くの話が有るのだから、人々がそれを好まないはずが無いではないか。その学問は又、積極的に天下を治めようとするものであり、その、清虚無為の思想は、所謂「自然」に因うことが人君の大綱である」と言われているものであり、一つ一つの事柄を自然に順って行おうとするものである。漢文帝、曹参などは、老子の目

に見えて明らかな教えを用いているが、しかし、単に老子の思想の表面的な部分のみを用いているに過ぎず、何事に於いても、ただ包み込んだ上で成り行きに任せようとしているに過ぎない。老子の学は、忍を最大の特色とし、その教えは、何事も無い時は一人のからつぽで弱々しい人の様で、いざと言う時にも自ら腰を上げようとはせず、そのため誰も抵抗出来ないのだ。張子房の如きがこれである。張子房の思想は全く老子の学問である。嶢関の戦いでは秦将と連合したが、突然その油断に乗じて攻撃した。鴻溝の約では、項羽と講和を結んだが、突如軍隊を戻してそれを殺した。これこそが老子の、柔弱の思想が発揮された場合なのである。恐るべし、恐るべし。彼の策略は回数を多く必要とはしない。一、二度この様にしただけで、高祖はその偉業を達成したのだ。（沈憫）

〔注〕

（1）「楊氏愛身而舉世崇尚之」：『孟子』に「世衰道微、邪説暴行有作、臣弑其君者有之、子弑其父者有之、孔子懼、作春秋。春秋、天子之事也。是故孔子曰、知我其惟春秋乎、罪我者其惟春秋乎。聖王不作、諸侯放恣、處士橫議、楊朱墨翟之言盈天下、天下之言不歸楊、則歸墨。楊氏爲我、是無君也。墨氏

- 兼愛、是無父也。無父無君、是禽獸也。公明儀曰、庖有肥肉、廄有肥馬、民有飢色、野有餓殍、此率獸而食人也。揚墨之道不息、孔子之道不著、是邪說誣民、充塞仁義也。仁義充塞、則率獸食人、人將相食。吾爲此懼、閑先聖之道、距楊墨、放淫辭、邪說者不得作。作於其心、害於其事、作於其事、害於其政。聖人復起、不易吾言矣。昔者禹抑洪水而天下平、周公兼夷狄驅猛獸而百姓寧、孔子成春秋而亂臣賊子懼。詩云、戎狄是膺、荊舒是懲、則莫我敢承。無父無君、是周公所膺也。我亦欲正人心、息邪說、距詖行、放淫辭、以承三聖者、豈好辯哉。予不得已也。能言距楊墨者、聖人之徒也」(『孟子』「滕文公下」p.452)と有る。
- (2)「清虚」：故有道之主、滅想去意、清虚以待、不伐之言、不奪之事、循名責實、使有司、任而弗詔、責而弗教、以不知爲道、以奈何爲實」(『淮南鴻烈集解』「卷九主術訓」p.301)。

- (3)「因者君之綱」：司馬談「六家要指」に「道家無爲、又曰、無不爲。其實易行、其辭難知。其術以虚無爲本、以因循爲用。無成執、無常形、故能究萬物之情。不爲物先、不爲物後、故能爲萬物主。有法無

法、因時爲業、有度無度、因物與合。故曰、聖人不朽、時變是守。虚者道之常也、因者君之綱也」(『史記』「卷一三〇」太史公自序第七十」p.329)と有る。尚、【49】條を参照。

- (4)「漢文帝・曹參」：『語類』は「漢文帝資質較好、然皆老氏術也」(『語類』「卷一三六」歷代三」p.324)、
「子房深於老子之學。曹參學之、有體而無用」(『語類』「卷一一〇」朱子十七 訓門八八」p.293)等と述べる、又『文集』も「愚謂、善學老子者、如漢文景、曹參、則亦不至亂天下。如蘇氏之說則亂天下也必矣」(『文集』「卷七十二」雜著 蘇黃門老子解)と述べる。
『史記』には「孝惠帝元年、天下初定、悼惠王富於春秋、參盡召長老諸生、問所以安集百姓、如齊故俗諸儒以百數、言人人殊、參未知所定。聞膠西有蓋公、善治黃老言、使人厚幣請之。既見蓋公、蓋公爲言治道貴清静而民自定、推此類具言之。參於是避正堂、舍蓋公焉。其治要用黃老術、故相齊九年、齊國安集、大稱賢相。…太史公曰、…參爲漢相國、清静極言合道。然百姓離秦之酷後、參與休息無爲、故天下俱稱其美矣」(『史記』「卷五十四」曹相國世家第一二十四」p.2028)と有る。尚、「曹參」が「只用得老子

皮膚」であつたという理解は、例えば、北宋の呂惠卿「道徳眞經傳表」に「曹參師蓋公而相齊國、孝文傳之河上而爲漢宗。僅得淺膚、猶幾康阜」（道徳眞經傳表1b(3)）と既に見られる。

(5) 「因循」：本條注(3)を参照。尚、北宋・司馬光「法言」注は「黄老之道貴因循」とする（新編諸子集成『法言義疏』問道卷第四）、「或問、道有因無因乎。」曰、「可則因、否則革」注p.125。中華書局、1987年）。

(6) 「枝梧」：「支梧」「支吾」「支梧」とも表記し、「言い逃れをする／抵抗する」の意味。(こ)は後者。『語類』には、「曰、蹶趨多過於猝然不可支吾之際、所以易動得心」(『語類』卷五十二「孟子 一」p.1240)、「曰、是氣先歎、故臨事不能支吾」(『語類』卷五十二「孟子 一」p.1247)等と有る。尚、『近代漢語詞典』は「支撐、撐持」(支吾)、「竭力維持、支撐」(枝梧)とする(何れもp.2389)。

(7) 「峽關之戰、忽乘其懈擊之」：『史記』に「沛公之從雒陽南出轅轅、良引兵從沛公、下韓十餘城、擊破楊熊軍。沛公乃令韓王成留守陽翟、與良俱南、攻下宛、西入武關。沛公欲以兵二萬人擊秦峽下軍、良說曰、秦兵尚彊、未可輕。臣聞、其將屠者子、賈豎易

動以利。願沛公且留壁、使人先行、爲五萬人具食、益爲張旗幟諸山上、爲疑兵、令酈食其持重寶啗秦將。秦將果畔、欲連和俱西襲咸陽。沛公欲聽之。良曰、此獨其將欲叛耳、恐士卒不從。不從必危、不如因其解擊之。沛公乃引兵擊秦軍、大破之。逐北至藍田、再戰、秦兵竟敗。遂至咸陽、秦王子嬰降沛公」(『史記』卷五十五「留侯世家第二十五」p.2037)、「是時、漢兵盛食多、項王兵罷食絕。漢遣陸賈說項王、請太公、項王弗聽。漢王復使侯公往說項王、項王乃與漢約、中分天下、割鴻溝以西者爲漢、鴻溝而東者爲楚。項王許之、即歸漢王父母妻子。軍皆呼萬歲。…項王已約、乃引兵解而東歸。漢欲西歸、張良、陳平說曰、漢有天下大半、而諸侯皆附之。楚兵罷食盡、此天亡楚之時也、不如因其機而遂取之。今釋弗擊、此所謂養虎自遺患也。漢王聽之。漢五年、漢王乃追項王至陽夏南、止軍、與淮陰侯韓信、建成侯彭越期會而擊楚軍」(『史記』卷七「項羽本紀第七」p.330)と有る。尚、『語類』はたびたび張子房に言及しているが、宋人が張子房を好んだことに就いては、川勝義雄著『中国文明選第十二卷 史学論集』朝日新聞社、昭和48年)が指摘し(p.288)、『三浦語類』

も言及してゐる(p.53)。又、南宋・范應元『老子道德經古本集註』(『續古逸叢書』所収)は第九章「功成名遂身退、天之道」の箇所で、「老子之言、萬世龜鑑。如子房者、乃合天之道也」と述べている。

(8)「鴻溝之約、回軍殺之」：『史記』に「項王、范增疑沛公之有天下、業已講解、又惡負約」(『史記』項羽本紀第七)p.316と有るのに依れば、こゝは(校6)に依り「講解」に改めるのが妥当か。

(9)「柔弱」：『老子』第三十六章。【1】條注(3)を参照。

(10)「消」：「須」と同じで、「不消」で「くする必要はない」／＼するに及ばない」の意。『宋元語言詞典』は「不消」を「無須、不必」(p.13)とする。尚、『朱子語類訳』注卷一～三【13】條注(1)を参照(p.19)。

【8】

問、「楊朱似老子」⁽¹⁾、頃見先生如此說。看來楊朱較放退⁽²⁾、老子反要以此治國、以此取天下⁽³⁾。曰、「大概⁽⁴⁾氣象⁽⁵⁾相似。如云『致虛極、守靜篤』⁽⁶⁾之類、老子初間亦只是要放退、未要放出那無狀⁽⁷⁾來。及至一反、方說『以無事取天下』⁽⁷⁾、如云『反者道之動、弱者道之用』

之類」⁽⁸⁾。「偶」

(校1)「概」、朝鮮整版、正中書局本、和刻本は「槩」に作る。

※楠本本はこの条無し。

〔訳〕

質問、「楊朱の説は老子に似ていると、先頃、先生がこの様に説かれたのを拝見しました。私が見たところ、楊朱の説は(直面している事柄から)退こうとする傾向が有りますが、老子はむしろその教えで国を治め天下を取ろうとしている様です」。朱子「おおよその具体的様子は、両者は相似しているのだ。』どこまでも虚を極め、静けさを深く守る』と言っているのは、老子も最初はやはりただひたすら退くことだけを考えていたのであり、何もしないという在り方を手放そうとはしなかったのだ。」反るといふ発想に至って、初めて『何事もしないで天下を取る』と説き、『もとに戻るのが道の動きであり、弱々しいのが道の働きである』等と言う様になったのだ。(沈僞)

〔注〕

(1)「楊朱」：【7】條注(1)『孟子』滕文公下を参照。

『語類』には「問、集注何以言佛而不言老。曰、老便只是楊氏。人嘗以孟子當時只關楊墨、不關老、不知

關楊便是關老。如後世有隱遯長往而不來者、皆是老之流。他本不是學老、只是自執所見、與此相似」

『語類』卷二十四「論語六 爲政篇下 攻乎異端章」p.587）、「楊朱乃老子弟子、其學專爲□」(『語類』卷六十「孟子十 盡心上 楊子取爲我章」p.1447)、「孟子不關老莊而關楊墨、楊墨即老莊子也」(『語類』卷一一六「釋氏」p.3007)、「楊朱即老子弟子。人言孟子不關老氏、不知但關楊墨、則老莊在其中矣」(『同』p.3007)等、楊朱と老子の思想の一致が多く指摘されている。尚、この議論も、例えば、蘇轍「私試進士策問二十八首」に「楊朱、浮屠之害無異於老子」(『蘇轍集』p.363。中華書局、1990年)と見られる様に、北宋に於ける議論を踏まえるものである。

(2)「放退」：「退く、背を向ける」の意に解した。『語類』には「及到灘脊急流之中、舟人來這上一篙、不可放緩。直須着力撐上、不一步不緊。放退一步、則此船不得上矣」(『語類』卷八「学」一 總論爲學之方」p.137)の様に文字通り「一步退く」ことを意味するものや、「此與對葉公之語略相似、都是放退一步說」(『同』卷四十四「論語二十六 憲問篇 莫我知也夫章」p.1138)の様に「讓歩する」を意味する用例も見

られる。張子房との関わりでは、「後來事業則都是黃老了、凡事放退一步」(『同』卷一三五「歴代」一」p.3222)と有る。

(3)「大概」：「おおよそ」の意。「人之先祖、則大概以理爲主、而亦兼以氣魄言之」(『語類』卷三「鬼神」p.46)等と有る。『近代漢語大詞典』は「大体情形、概括地」とする(p.369)。

(4)「氣象」：「目に見える具体的様」の意で解した。「氣象」に就いては、垣内景子「心」と「理」をめぐる朱熹思想構造の研究』第三章第一節 朱熹門人・黄榦「氣象」と「工夫」(汲古書院、平成17年)、『三浦語類』(p.216,p.524)を参照。

(5)「致虚極、守静篤」：「老子」に「致虚極、守静篤、萬物並作、吾以觀復。夫物芸芸、各復歸其根。歸根曰靜、是謂復命。復命曰常、知常曰明、不知常、妄作、凶」(『老子』第十六章)と有る。

(6)「無状」：「老子」に「其上不皦、其下不昧、繩繩不可名、復歸於無物。是謂無状之状、無物之象、是謂惚恍」(『老子』第十四章)と有る。

(7)「以無事取天下」：「老子」に「以正治國、以奇用兵、以無事取天下。吾何以知其然也哉。以此」(『老子』

第五十七章)と有る。

(8)「反者道之動、弱者道之用」：『老子』に「反者、道之動。弱者、道之用。天下萬物生於有、有生於無」(『老子』第四十章)と有る。

【9】

楊朱之學出於老子⁽¹⁾、蓋是楊朱曾就老子學來、故莊列之書皆說楊朱⁽²⁾。孟子闢楊朱、便^(校1)是闢莊老了。釋氏有一種低底、如梁武帝是得其低底⁽³⁾。彼初入中國、也未在⁽⁴⁾。後來到中國、却竊取老莊之徒許多說話、見得儘高⁽⁵⁾、新唐書李蔚贊^(校2)說得好。「南升⁽⁷⁾」

(校1)「便」、朝鮮整版は「優」に作る。(校2)「李蔚贊」、朝鮮整版、和刻本、正中書局本は「贊」「李蔚」に作る。

※ 楠原本はこの条無し。

〔訳〕

楊朱の学問は老子から生れたものだ。思うに、楊朱はかつて老子に就いて学んできたのであろう、だから、莊子・列子の書が全て楊朱に説き及んでいるのだ。孟子は楊朱を退けているが、それは即ち莊子・老子を退けているのに他ならない。仏教には次元の低い部分があり、梁の武帝な

どはその低い部分を学んだのだ。仏教が初めて中国に入ってきたばかりの時は、まだまだ不十分であった。後に中国に行き渡ること、老莊の徒の多くの話を盗み取り、見識が極めて高くなったのだ。『新唐書』李蔚傳の「贊」がこの点を善く説いている。(鄭升南)

〔注〕

(1)「楊朱之學出於老子」：【7】條を参照。

(2)「莊列之書皆說楊朱」：『莊子』駢拇「法篋」「天地」「徐無鬼」の各篇が「楊墨」に言及し、『列子』には「楊朱第七」が有り、「黃帝第二」、「湯問第五」、「楊朱第七」「說符第八」の各篇が墨翟に言及している。

(3)「梁武帝是得其低底」：『語類』には「如東晉之尚清談、此便是楊氏之學。楊氏即老莊之道、少間百事廢弛、遂啓夷狄亂華、其禍豈不慘於洪水猛獸之害。又如梁武帝事佛、至於社稷丘墟、亦其驗也」(『語類』卷五十五「孟子五 滕文公下 公都子問好辯章」p.1320)。「佛氏之學亦出於楊氏。其初如不愛身以濟衆生之說、雖近於墨氏、然此說最淺近、未是他深處。後來是達磨過來、初見梁武、武帝不曉其說、只從事於因果、遂去面壁九年。只說人心至善、即此便是、不用辛苦修行。又有人取莊老之說從而附益之、

所以其說愈精妙、然只是不是耳」(『語類』卷一二六「釋氏」p.3007)と有る。

- (4) 「也未在」：「まだまだ不十分」の意。文末に置かれる「也未在」の例は『語類』には他に見られないが、「未在」は、「召公不悦、這意思曉不得。若論事了、儘未_レ在」(『語類』卷七十九「尚書一君爽」p.2059)、「問、欲求大本以總括天下萬事。曰、江西便有這箇議論。須是窮得理多。然後有貫通處。今理會得一分、便得一分受用。理會得二分、便得二分受用。若一以貫之、儘未_レ在」(『同』卷一一五「訓門人三」p.2784)と有る。古賀「初稿」が「いまだし！まだだ。まだ不十分だ。『在』は句末にあつて断言的口調を表す助辞」(p.167)と指摘している様に、禪の語録に多出する。「若要透見也未在」(『碧巖錄』卷六。T.461.186c)、「曰、終不敢孤負和尚。師曰、也未在」(『景德傳燈錄』卷二二「建州白雲智作眞寂禪師」。T.51.378c)、「師曰、直至千歲也未在」(『五燈會元』卷四「揚州光孝院慧覺禪師」、p.244)等。尚、禪文献に於ける「也未在」の用例は野口善敬氏の教授による。

- (5) 「竊取老莊之徒許多說話、見得儘高」：『語類』は「釋氏書其初只有四十二章經、所言甚鄙俚。後來日

添月益、皆是中華文士相助撰集」(『語類』卷一二六「釋氏」p.3010)と述べてゐる。

- (6) 「新唐書李蔚贊」：「贊曰、人之惑怪神也、甚哉。若佛者、特西域一稿人耳。裸顛露足、以乞食自資、糞辱其身、屏營山禁、行一概之苦、本無求于人、徒屬稍稍從之。然其言荒茫漫靡、夷幻變現、善推不驗無實之事、以鬼神死生貫爲一條、據之不疑。培嗜欲、棄親屬、大抵與黃老相出入。至漢十四葉、書入中國。蹟夫生人之情、以耳目不際爲奇、以不可知爲神、以物理之外爲畏、以變化無方爲聖、以生而死、死復生、回復償報、歆豔其間爲或然、以賤近貴遠爲憲。鞞譯差殊、不可研詰。華人之謠誕者、又攘莊周、列禦寇之說佐其高、層累架騰、直出其表、以無上不可加爲勝。妄相夸脅而倡其風。於是、自天子逮庶人、皆震動而祠奉之」(『新唐書』卷百八十一「李蔚傳」p.5355。中華書局、1986年)と有る。
- (7) 「南升」：鄭南升、字は文振、広東省潮陽の人。『補遺』卷六十九(69.167b)「優尚」、『師事』(p.91)。

【10】

人皆言孟子不排老子、老子便〔段〕是楊氏。「可學〔段之〕」〔一〕

〔校1〕「便」、朝鮮整版は「」に作る。〔校2〕「可學」、底本は無し。朝鮮整版、正中書局本、和刻本に依り補う。

※楠本本はこの条無し。

〔訳〕

人々は皆、孟子は老子を退けてはいないと言うが、老子の教えは楊朱の教えと同じなのだ。(鄭可學)

〔注〕

(1)「可學」：鄭可學、字は子上、号は持齋。福建省莆田の人。『學案』卷六十九(p.2300)、『補遺』卷六十九(69.98a)。尚、『師事』(p.83)、『三浦語類』(p.84)。

【11】

問、「老子與郷原¹⁾如何」。曰、「老子是出人理之外、不好聲、不好色²⁾、又不做官、然害倫理³⁾。郷原猶在人倫中、只是箇⁴⁾無見識⁵⁾底好人」。〔淳⁴⁾義剛一條見論語類⁶⁾。〕

〔校1〕「箇」、楠本本「个」に作る。〔校2〕「見識」、楠本本二字を欠く。〔校3〕「義剛一條見論語類」、楠本本無し。

※本條に就いては、大濱皓「朱子の老子觀」(『神田喜一郎

博士追悼中國學論集』所収。株式会社二玄社、1986年)に解説が見られる。

〔訳〕

質問「老子と郷原は如何ですか」。朱子「老子は社会倫理の外におり、名声を好まず、物欲に捉われず、出世も好まないが、倫理を害しているのだ。郷原は人倫の内にいるが、単に見識の無い好い人に過ぎない」。(陳淳。黄義剛が記録した一条は、『論語』に関する箇所に見られる)。

〔注〕

(1)「郷原」：『論語』に「子曰、郷原、徳之賊也」(新編諸子集成『論語集解』陽貨下、p.1219。中華書局、1990年)と有り、又、『孟子』に「孔子曰、過我門而不入我室、我不憾焉者、其惟郷原乎。郷原、徳之賊也。曰、何如斯可謂之郷原矣。曰、何以是嚆嚆也。言不顧行、行不顧言、則曰古之人、古之人、行何爲蹢躅涼涼、生斯世也、爲斯世也善、斯可矣。闐然媚於世也者、是郷原也。萬子曰、一郷皆稱原人焉、無所往而不爲原人。孔子以爲徳之賊、何哉。曰、非之無舉也、刺之無刺也、同乎流俗、合乎汚世、居之似忠信、行之似廉潔、衆皆悅之、自以爲是、而不可與入堯舜之道、故曰徳之賊也。孔子曰、惡似而非者。惡

莠、恐其亂苗也。惡佞、恐其亂義也。惡利口、恐其亂信也。惡鄭聲、恐其亂樂也。惡紫、恐其亂朱也。惡鄉原、恐其亂德也。君子反經而已矣。經正則庶民興、庶民興、斯無邪慝矣」(『孟子』卷十四「盡心下」p.1029)と有る。

(2) 「不好聲、不好色」：『老子』第十二章「五色令人目盲、五音令人耳聾、五味令人口爽、馳騁畋獵令人心發狂、難得之貨令人行妨。是以聖人爲腹不爲目、故去彼取此」を踏まえると思われる。

(3) 「倫理」：『周易』序卦第十の「有天地、然後有萬物。：有上下、然後有禮義有所錯」の韓康伯注に「咸柔上而剛下、感應以相與、夫婦之象莫美乎斯。人倫之道、莫大乎夫婦」(『王弼集校釋』所収『周易』注p.583)と有る。

(4) 「淳」：陳淳、字は安卿、号は北溪。福建省漳州の人。『北溪字義』の著者有る。『宋史』卷四三〇、『學案』卷六十八 (p.2220)、『補遺』卷六十八 (68.1a)。「師事」(p.134)尚、『三浦語類』(p.58)。

(5) 「義剛一條」：「義剛云、去冬請問鄉原比老子如何、蒙賜教謂、老子害倫理、鄉原却只是箇無見識底人」(『語類』卷四十七「論語二十九 陽貨篇 鄉原德之

賊章」p.1187)と有る。更に「又問、孔子惡鄉原、如老子可謂鄉原否。曰、老子不似鄉原。鄉原却尚在倫理中行、那老子却是出倫理之外。它自處得雖甚卑、不好聲、不好色、又不要官做、然其心却是出於倫理之外、其說煞害事。如鄉原、便却只是箇無見識底好人、未害倫理在」(『語類』卷一三六「歷代三」p.3242)と有る。「義剛」に就いては【16】條注(2)を参照。

【12】

老子中有仙意⁽¹⁾。

※ 楠本本はこの条無し。

〔訳〕

老子の教えの中には「仙意(神仙的な考え)」が見られる。

〔注〕

(1) 明・呂柟『朱子抄釋』は「釋、此恐非朱子之語。審有之非所以教後學也」(『朱子抄釋』卷二)と、この條を朱熹の發言ではなごとしてゐる。

列子

【13】

列子平淡⁽¹⁾ 疏曠^(校1)。〔方子⁽³⁾〕

〔校1〕「疏曠」、楠本本「疎曠」に作り、朝鮮整版、正中書局本、和刻本は「疎曠」に作る。

*朝鮮整版はこの條は【17】條の後に位置する。

〔訳〕

列子の教えはあつさりとしていて、豪放である。(李方

子)

〔注〕

(1) 「平淡」:「無駄の無い、あつさりとした」の意。『語

類』には「論語中、程先生及和靖説、只於本文添一

兩字、甚平淡、然意味深長、須當子細看」(『語類』卷

十九「論語一」p.43)と有る。又、「顔子之樂平淡、

曾點之樂已勞攘了」(『語類』卷三十一「論語十三」

p.798)と、老子を形容する「勞攘」の語と対する概念

としても見られる。

(2) 「疏曠」:「豪放」の意。『語類』には、「如子張自説、

我之大賢歟、於人何所不容。我之不賢歟、人將拒

我。如之何其拒人也。此說話固是好、只是他地位未

説得這般話。這是大賢以上、聖人之事。他便把來蓋

人。其疏曠多如此」。(『語類』卷三十九「論語二十一

先進篇上 子貢問師與商也章」p.1015)と有る。

「疏曠」の語は『舊唐書』に「萬頃屬文敏速、然性疏

曠、不拘細節、無儒者之風」(『舊唐書』卷一九〇中

「元萬頃傳」p.5011。中華書局、1975年)と見られる

が、これは、むしろ「細かい事に拘らない」の意と思わ

れる。尚、『漢語大詞典』漢語大詞典出版社、1991

年は①豪放、豁達。②遠離、遠隔。③孤單寂寞。④

空闊、廣大、寛宏」(第八冊、p.509)とする。

(3) 「方子」:李方子、字は公晦、邵武の人。『學案』

六十九(p.2261)。『師事』(p.207)。

莊子

【14】

「莊周曾做秀才、書都讀來、所以他說話都説得也是。

但不合沒拘檢⁽¹⁾。便^(校1)凡^(校2)百^(校3)了」。或問、「康節近似

莊周」。曰、「康節較穩」。〔煮⁽³⁾〕

(校1)「便」、朝鮮整版は「便」に作る。(校2)「凡」、正

中書局本は「九」に作る。

※楠本本はこの条無し。

〔訳〕

「莊子も秀才であつて、多くの書を読んでいたので、だか

ら彼の話はみな非常に善く説かれている。但し、自らを律

すべきであつた。何もかも詰め込んでしまつた。ある者の質問「康節は莊子に近いですか」。朱子「康節の方がやや穏当だ。」(呂熹)

〔注〕

(1)「拘檢」：「自らを律する」の意。「言善不稱徳、論功不據實。虚誕者獲譽、拘檢者離毀」(『後漢書』卷六十一「左雄傳第五十一」p.2017。中華書局、1982年)と有る。尚、『近代漢語大詞典』は、「檢束、約束」とし「柳相初名載、後改爲渾。佐江西幕、嗜酒好入塵市、不事拘檢」(『唐語林』を引く(p.931))。

(2)「凡百」：「あらゆる、すべて、一切」の意。『語類』には「而今人會說話行動、凡百皆是天之明命。人心惟危、道心惟微也、也是天之明命」(『語類』卷十六「大學二」p.317)、「若未盡己之心而不達於物、則是不忠信。凡百處事接物、皆是不情實、且謾爲之」(『語類』卷二十一「論語三」p.503)、「亦有通書解、無數凡百說話」(『同』卷九十四「周子之書」p.2389)と有る。

(3)「熹」：呂熹、字は徳昭、南康の人。「補遺」卷六十九(69.163a)、「師事」(p.289)。

【15】

莊子比邵子見較高、氣較豪。他是事事識得、又却蹴踏^①了、以爲不足爲。邵子却有規矩^②「方子」

〔訳〕

莊子は邵康節と比べると、その見識は高く、その気風は豪快である。莊子は一つ一つの事柄を理解しているのだが、却つてそれらをめちやくちやに踏みつけてしまい、実行するまでもないと考えているのだ。邵康節にはむしろ節度が有る。(李方子)

〔注〕

(1)「蹴踏」：「踏む、踏みつける」の意。『近代漢語大詞典』は「早、蹬踏」とし、「我向伊道、龍象蹴踏、非驢所堪」(『古尊宿語録』卷四「鎮州臨濟慧照禪師語錄」)等を引く(p.319)。

(2)本條とほぼ同じ内容が「問、程子謂康節空中樓閣。曰、是四通八達。莊子比康節亦髣髴相似。然莊子見較高、氣較豪。他是事事識得了、又却蹴踏著、以爲不足爲。康節略有規矩。然其詩云、賓朋莫怪無拘檢、眞樂攻心不奈何。不知是何物攻他心」(『語類』卷百「邵子之書」p.2543)と有る。

【16】

李夢先⁽¹⁾問、「莊子、孟子同時、何不^(校1)一相遇。又不聞相道及、「林作、「其書亦不相及」如何^(校2)」。曰^(校3)、「莊子當時也無人宗之、他只^(校4)在僻處自說、然亦止是楊朱之學^(校5)。但楊氏說得大了、故孟子力排之」。「義剛、夔孫同^(校6)」。

(校1)「不」、楠本本「不會」に作る。(校2)「如何」、楠本本「是如何」に作る。(校3)「曰」、楠本本「先生曰」に作る。(校4)「只」、楠本本「只是」に作る。(校5)「學」、楠本本は「徒」に作る。(校6)「但楊氏說得大了、故孟子力排之。義剛、夔孫同」、楠本本無し。

〔訳〕

李夢先の質問「莊子と孟子は同時代であるのに、何故一度も出会わなかったのでしょうか。又、互いに言及し合っていないのは「林夔孫の記録では」その著述で互いに言及していない」となっている、「何故でしょうか」。朱子「莊子は、当時に在つても彼の教えを信奉する者はおらず、彼は世間を避けた所で自説を述べていたに過ぎず、又、その教えは楊朱の学問に過ぎなかつたのだ。但し、楊朱は大いに自説を陳べていたので、孟子は極力それを退けようとしたのだ」。(黄義剛の記録。林夔孫の記録も同じ)

(1)「李夢先」：詳細不明。『語類』には「李夢先問情意之別。曰、情是會做底、意是去百般計較做底。意因有是情而後用」(『語類』卷五「性理」二「性情心意等名義」p.96)と有る。

(2)「義剛」：黄義剛、字は毅然、臨川の人。『學案』卷六十九(p.231)、「師事」(p.234)。「夔孫」：林夔孫、字は子武、福州古田県の人。『學案』卷六十九(p.2274)、「師事」(p.240)。

【17】

問、「孟子與莊子同時否」。曰、「莊子後得幾年、然亦不爭多⁽¹⁾」。或云、「莊子都不說著^(校1)孟子一句」。曰、「孟子平生足跡只^(校2)齊、魯、滕、宋、大梁之間、不曾過大梁之南⁽²⁾。莊子自是楚人、想見聲聞不相接。大抵⁽³⁾楚地便^(校3)多有此樣差異底人物學問、所以孟子說陳良云云⁽⁴⁾」。曰^(校4)、「如今看許行之說如此鄙陋⁽⁵⁾、當時亦有數十百人從他、是如何」。曰、「不特此也、如莊子書中說惠施、鄧析之徒⁽⁶⁾、與夫『堅白異同』之論⁽⁷⁾」「歷舉其說^(校5)」、是甚麼學問。然亦自名家」。或云、「他恐是借此以顯理」。曰、「便^(校3)是禪家要如此。凡事須要倒說、如所謂『不管夜行、投明要到』⁽⁸⁾、如『人上樹、口銜^(校6)樹

枝、手足懸空、却要答話』⁽⁹⁾、皆是此意。廣云、「通鑑中載孔子順與公孫龍辯說數話」^{(校7)(10)}、似好。曰、「此出在孔叢子」⁽¹⁾、其他說話又不如此。此書必是後漢時人撰者。

若是古書、前漢時又都不見說是如何。其中所載孔安國書之類⁽¹²⁾、其氣象萎爾^(校8)、都不似西京時文章」。「廣」

（校1）「著」、楠本本、和刻本、正中書局本は「着」に作る。（校2）「只」、楠本本は「只在」に作る。（校3）

「便」、朝鮮整版は「便」に作る。（校4）「云云、曰」、

楠本本は「曰、陳良、楚産也。悦周公仲尼之道、北學于中國。廣云」に作る。これと同内容は【19】に見られる。（校5）「歴舉其說」、楠本本は地の文に作る。

（校6）「銜」、和刻本は「脚」に作り、楠本本、朝鮮整版、正中書局本は「銜」に作る。（校7）「話」、楠本本、朝鮮整版、正中書局本は「銜」に作る。（校8）底本は

『藺』似當作『茶』。陳本『茶』と注釈し、楠本本は「茶」に作り、正中書局本、和刻本は「茶」に作る。

〔訳〕

質問「孟子と莊子は同時代ですか」。朱子「莊子が数年遅れるが、それ程隔たつてはいない。或る者「莊子は孟子については一言も言及していません」。朱子「孟子はその生涯で齊、魯、滕、宋、大梁の間を遊説しただけであり、大

梁の南には行ったことがなかった。莊子はもちろん楚人であり、たとえ会いたいと思つたとしても、評判が届くことはなかったのだ。要するに、楚の地には、この様に様々な人々や学問が多く有り、だから孟子は『陳良…』などと言っているのだ。質問「今、許行の説を見てみると、こんなにも浅薄なものであるのに、当時に於いて多くの人々が彼に従っていたというのは何故ですか」。朱子「それは許行に限つたことではないのだ。莊子が著述の中で述べている惠施、鄧析の徒や、あの「堅白異同」の論などは（その説を列挙している）、これらがどんな学問だと言うのか。しかし、自ら「家」と称しているではないか。或る者「莊子は恐らくはこれらの説を用いてその道理を明らかにしようとしたのですか」。朱子「それは禪宗はその様にしようとしたのだ。必ず全て逆説的に言おうとしているもので、『夜間外出は許さないが、明け方には戻ること』、『人が樹に登り、口は樹の枝を銜え、手足は中に浮いていた状態で、さあ話をしなければならぬぞ』等は、みなこの意味である。輔廣『資治通鑑』に孔子順が公孫龍と弁論した教話が記載されていますが、なかなか好いようです。朱子「これは『孔叢子』に基づくもので、その他の話はそうではない。『孔叢子』は後漢の人の撰述に違いない。もしこれが古い書物

であるとすれば、前漢の時にこれらの話が全く見られないのをどう説明するのか。『孔叢子』が記載する孔安国の書などは、その気風は枯れ萎れていて、全く前漢の時の文章らしくない。(輔広)

〔注〕

- (1) 「不爭」：「へだたりにない、差がない」の意。『語類』には「曰、顔子去聖人不爭多、止隔一膜、所謂於吾言無所不説」(『語類』卷二十四「論語 六」p.569)、「問、孔子答顔淵仲弓問仁處、旨同否。曰、不爭多、大概也相似」(『語類』卷四十二「論語 二十四」p.1074)、「伊川說海漚一段、與橫渠水冰說不爭多」(『語類』卷九十七「程子之書 二」p.2483)等と有る。『宋元語言詞典』は「不相差」(p.131)とし、『田中』は「争」を「へだたり、差のある」とし(p.85)とし袁賓編著、『禪宗著作詞語匯釋』(江蘇古籍出版社、1990年)は、「不爭多」也是差不多的意思」(p.16)と、「不爭多」で熟語とする。
- (2) 「孟子平生足跡只齊、魯、滕、宋、大梁之間、不曾過大梁之南」：『孟子』の内容に依るものであろう。尚、武内義雄「孟子について」(『孟子遊歷年表』(小林勝人訳注『孟子』(下)所収。岩波文庫、2000年版)

- (3) 「大抵」：「ようするに」の意。『語類』には「大抵鬼神用生物祭者、皆是假此生氣爲靈」(『語類』卷三「鬼神」p.5)等とみられる。王鐸著『唐宋筆記語辭匯釋』(中華書局、2001年)は「大抵、猶言、總之」(p.33)とし、『近代漢語大詞典』は「總之、主要」(p.368)とする。

- (4) 「孟子說陳良云云」：『孟子』に「吾聞用夏變夷者、未聞變於夷者也。陳良楚產也、悅周公仲尼之道、北學於中國。北方之學者、未能或之先也。彼所謂豪傑之士也。子之兄弟事之數十年、師死而遂倍之。〔趙岐注・陳良生於楚、北游中國、學者不能有先之者也。可謂豪傑過人之士也。子之兄弟、謂陳相、陳辛也。數十年師事陳良、良死而倍之、更學於許行、非之也〕」(『孟子』「滕文公上」p.393)と有る。

- (5) 「許行」：『孟子』に「有爲神農之言者許行、自楚之滕、踵門而告文公曰、遠方之人、聞君行仁政、願受一廛而爲氓。文公與之處、其徒數十人、皆衣褐、捆屨織席以爲食。陳良之徒陳相、與其弟辛、負耜耜、而自宋之滕曰、聞君行聖人之政、是亦聖人也。願爲聖人氓。陳相見許行而大悅、盡棄其學而學焉」(『孟子』「滕文公上」p.365)と有る。

(6) 「莊子書中說惠施、鄧析之徒」：『漢書』『藝文志』には「惠子一篇」「鄧析二篇」と有る。「惠施」の名は「莊子」「雜篇」に多く見られるが、「鄧析」の名は「莊子」には見られない。『列子』「仲尼」「力命」「楊朱」には「鄧析」の名は見られるが、「惠子」の名は無い。両者の名が並んで登場するものとしては、例えば『荀子』「非十二子」「不苟篇」「儒效篇」等が有る。尚、「莊子」「天下篇」には、「相里勤之弟子、五侯之徒、南方之墨者、苦獲、己齒、鄧陵子之屬、俱誦墨經、而倍諺不同、相謂別墨、以堅白同異之辯相訾、以觭偶不件之辭相應。以巨子爲聖人、皆願爲之尸、冀得爲其後世、至今不決」(『莊子集解』p.290)と、詭弁を用いて互いに批判し合う墨者の中に「鄧陵子」なる者がいたとされている。

(7) 「堅白異同之論」：『莊子』『齊物論』は惠施を称して「彼非所明而明之、故以堅白之味終、而其子又以文之綸終、身終無成」(『莊子集解』p.18)と言い、「徳充符」は「天選子之形、子以堅白鳴」(『同』p.54)と批判している。又、惠施の「異同」は『莊子』『天下篇』の後半部分に見られる。和刻本は「堅白異同」を『莊子』に見られる惠施の説として訓読しているが、本巻

【19】條に依れば、公孫龍子の「堅白同異」を意味していると考えられる。

(8) 「不管夜行、投明要到」：『趙州落後到投子、便問、死中得活時如何。師云、不許夜行、投明須到』(孫昌武、衣川賢次、西口芳男校点、中國佛教典籍選刊『祖堂集』卷六「投子和尚」p.283。中華書局、2007年)、「問、百了千當時如何。師曰、不許夜行、投明須到」(『景德傳燈録』卷十三。T51.303b)と有る。又、『大慧普覺禪師法語』(T47.896a)にも見られる。

(9) 「人上樹、却要答話」：「師問僧、如人在高樹上、口銜樹枝、脚下踏樹、手不攀枝、下有人問、如何是西來意。又須向伊道、若道又被撲殺、不道違於他問。汝此時作摩生指他、自免喪身失命」(『祖堂集』卷十九「香巖和尚」p.829)、「一日謂衆曰、如人在千尺懸崖、口銜樹枝、脚無所踏、手無所攀。忽有人問如何是西來意。若開口答即喪身失命。若不答又違他所問。當恁麼時纒麼生」(『景德傳燈録』卷十一。T51.284b)と有る。又、『大慧普覺禪師法語』(T47.827b)にも見られる。

(10) 「孔子順」：孔子八世子孫。だが、『資治通鑑』が記

録する公孫龍と論争した人物は七世孔穿であつて孔子順ではない。「趙王封其弟爲平原君。平原君好士，食客嘗數千人。有公孫龍者，善爲堅白同異之辯，平原君客之。孔穿自魯適趙，與公孫龍論臧三耳，龍甚辯析。子高弗應，俄而辭出，明日復見平原君。平原君曰、疇昔公孫之言信辯也、先生以爲何如。對曰、然。幾能令臧三耳矣。雖然、實難。僕願得又問於君、今謂三耳甚難而實非也、謂兩耳甚易而實是也、不知君將從易而是者乎、其亦從難而非者乎。平原君無以應。明日、謂公孫龍曰、公無復與孔子高辯事也。其人理勝於辭、公辭勝於理、終必受詘」(『資治通鑑』卷三「周紀三」赧王十七年「p.114。中華書局、1987年)と有る。

(11)「此出在孔叢子」：『孔叢子』「公孫龍第十一」に見られる。

(12)「其中所載孔安國書之類」：例えば、『孔叢子』に「幸我問書云、納于大麓、烈風雷雨弗迷、何謂也。孔子曰、此言人事之應乎天也。堯既得舜、歷試諸難已。而納之于尊顯之官、使大錄萬機之政。是故陰陽清和、五星不悖烈、風雨各以其應、不有迷錯愆。伏明舜之行合于天也」(『孔叢子』「論書第二」)と見られ

るものは、『尚書』卷二「舜典」の「納于大麓、烈風雷雨弗迷」に対する「傳」に「麓、録也。納舜、使大錄萬機之政、陰陽和、風雨時、各以其節、不有迷錯愆。伏明舜之德合於天」と有ると一致する。